

「東京文化資源区構想」序論 Cultural Resources in Central Tokyo North ～なぜ明治の文化人たちは東京を歩き回っていたのか～

An Introduction to the Plan for the Tokyo Cultural Resources District:
Why Did Meiji Period Intellectuals Roam Tokyo?

「東京文化資源区」とは、東京都心から北東部方面の、神保町、神田、秋葉原、湯島、本郷、上野、谷根千、根岸に至る地区の名称であり、実はこれらの地区は湯島天満宮を中心として半径2kmの徒歩圏にほぼ収まってしまう。

そして、この「東京文化資源区」には、近世、近代、現代と時代をまたぐ、世界的な水準の文化資源が集積している。具体的には、神保町は古書店街と出版社による「出版文化資源」、神田は神田祭等の江戸っ子気質を継承した「市民文化資源」、秋葉原は漫画・アニメ等による「ポップカルチャー資源」、湯島は湯島天満宮や湯島聖堂による「精神文化資源」、本郷は東京大学による「学術文化資源」、上野は博物館群と東京藝術大学による「芸術文化資源」、谷根千は関東大震災と戦災を無事にくぐり抜けた町屋と路地の街並みによる「生活文化資源」、根岸は根岸文化村等による「口語文学資源」が集積している。これら「東京文化資源区」は、上野の高台を除いて、土地の区画が細かい下町エリアが多かったこともあり、高度成長期以降の大規模な再開発からは取り残されてきた。それゆえ、上述した通り、さまざまな分野での世界的な水準の文化資源が集積するアーカイブとしての価値を維持し続けてきた。

そして、このようにさまざまな文化資源の蓄積を有する「東京文化資源区」において、エンドユーザーとビジネスモデルをあらかじめ構築したうえで、リノベーションを行う創政策的政策としての「江戸屋敷プロジェクト」を本論では提案している。



The Tokyo Cultural Resources District refers to an area northeast of central Tokyo which includes Jinbocho, Kanda, Akihabara, Yushima, Hongo, Ueno, Yanesen, and Negishi. The area is mostly contained within a two-kilometer radius around the Yushima Tenman-gu Shrine and thus is walkable. World-class cultural resources, some of which date back to the Edo Period, are concentrated in the Tokyo Cultural Resources District. Jinbocho represents publishing culture with its used bookstore district and publishing companies. Kanda represents civil culture, inheriting the character of the people of Edo as seen in the Kanda Festival (*kanda-Matsuri*). Akihabara represents pop culture associated with comic books and cartoons. Yushima represents spiritual culture attributed to the Yushima Tenman-gu Shrine and Yushima Seido (*sacred hall*). Hongo represents academic culture ascribed to the University of Tokyo. Ueno represents artistic culture as seen in its museums and the Tokyo University of the Arts. Yanesen presents a traditional lifestyle with its townscape consisting of merchant houses (*machiya*) and alleyways that survived the Great Kanto Earthquake and World War II. Negishi is rich in colloquial literature, which is preserved by the Negishi Cultural Village and other entities. With the exception of the elevated areas in Ueno, the Tokyo Cultural Resources District includes many traditional working-class neighborhoods (*shitamachi*) with small, irregular plots, and so was not a target for the large-scale redevelopment projects that occurred in Japan's period of rapid economic growth. For this reason, the district has maintained its value as an archive of various world-class cultural resources like those described above. This paper proposes an Edo mansions (*edo yashiki*) project as a creative policy for the culturally rich Tokyo Cultural Resources District. In this project, building renovations will be conducted after end users are identified and after the business model is developed.

1 | 空虚から南西へ

日本を愛したフランスの哲学者、ロラン・バルトが東京という都市を評して、「その中心は空虚」であり、「立ち入り禁止になっているとともに、だれの関心も引くことがない場所（中略）のまわりに、東京の都市全体が円をえがいて広がっている」と語ったことは、未だ記憶に新しい¹⁾。

もっとも、東京はその「空虚」を中心として、全方位に均質な展開をしてきたわけではない。近代化の過程で、特に第二次世界大戦後は、東京の南西方面を主軸として整備が進められてきた。

たとえば、霞が関は、江戸時代には大名屋敷が並ぶ地域であったが、明治時代以降に官公庁施設の集積地となった。虎の門は江戸時代には武家地や寺社地であったが、霞が関（中央官庁）に隣接し、永田町（政界）からも至近であるという立地特性から、戦後は特殊法人等が入居するオフィス街として発展した。赤坂は、江戸時代には坂下は水をたたえた溜池のほとりに料理屋が並び、坂上の高台（現在のTBS）には大名や旗本の屋敷が並ぶまちであった。明治時代に坂上の大名屋敷跡に近衛第三連隊が移転してきたことから、坂下は軍人等が利用する料亭街となった。さらに戦後は赤坂プリンス、ニュージャパン、オークラ、ニューオータニ、ヒルトン等のシティホテルが林立し、ナイトクラブやバー等が隆盛する繁華街として発展した。

隣接する六本木も、江戸時代は武家地と寺社地であったが、明治時代に歩兵第一連隊（現在のミッドタウン）、歩兵第三連隊（現在の国立新美術館と政策研究大学院大学）が配置され、軍隊のまちとなった。戦後、これらの軍用地は連合国軍（後に米軍）に接収されたため、外国人向けの飲食店等が立ち並ぶようになり、赤坂と並ぶナイトスポットとして活況を呈するようになった。青山は江戸時代には武家屋敷と原っぱであったが、明治時代には武家屋敷跡に陸軍大学校（現在の青山中学校）、歩兵第四連隊（現在の青山学院高校、国学院高校）、第一師団司令部

（南青山1丁目）が配置され、原っぱは青山練兵場として整備された。この青山練兵場は大正時代に明治神宮外苑が創建され、1964年の東京オリンピックにおいてはメインスタジアムとなった。渋谷は、まちの中心を流れる渋谷川に沿って、大江戸の市域を示す朱引が引かれていた。

隣接する一帯は江戸時代には武家地であったが、明治時代に陸軍の代々木練兵場となった。練兵場は戦後に連合国軍に接収され、ワシントンハイツ（在日米軍将校の住宅）が建設された。その後、1964年の東京オリンピックでは代々木選手村として使用された（現在は代々木公園とNHK）。このような背景のもと、もともとは陸軍の兵隊が遊ぶ場所であった原宿・渋谷には米国人をはじめとして外国人が集まるようになり、それに惹かれて日本の若者も集まるハイカラなまちに変貌していった。そして、オリンピック以降、郊外において新興住宅地が整備されていくことにより、渋谷は交通結節点としての価値を高めていったのである。そして、オリンピックへ向けて、都心の三宅坂から上記の赤坂、青山、表参道を経て渋谷に至る国道246号は道路幅が大幅に拡張され、幹線道路としての重要性をより高めていった。

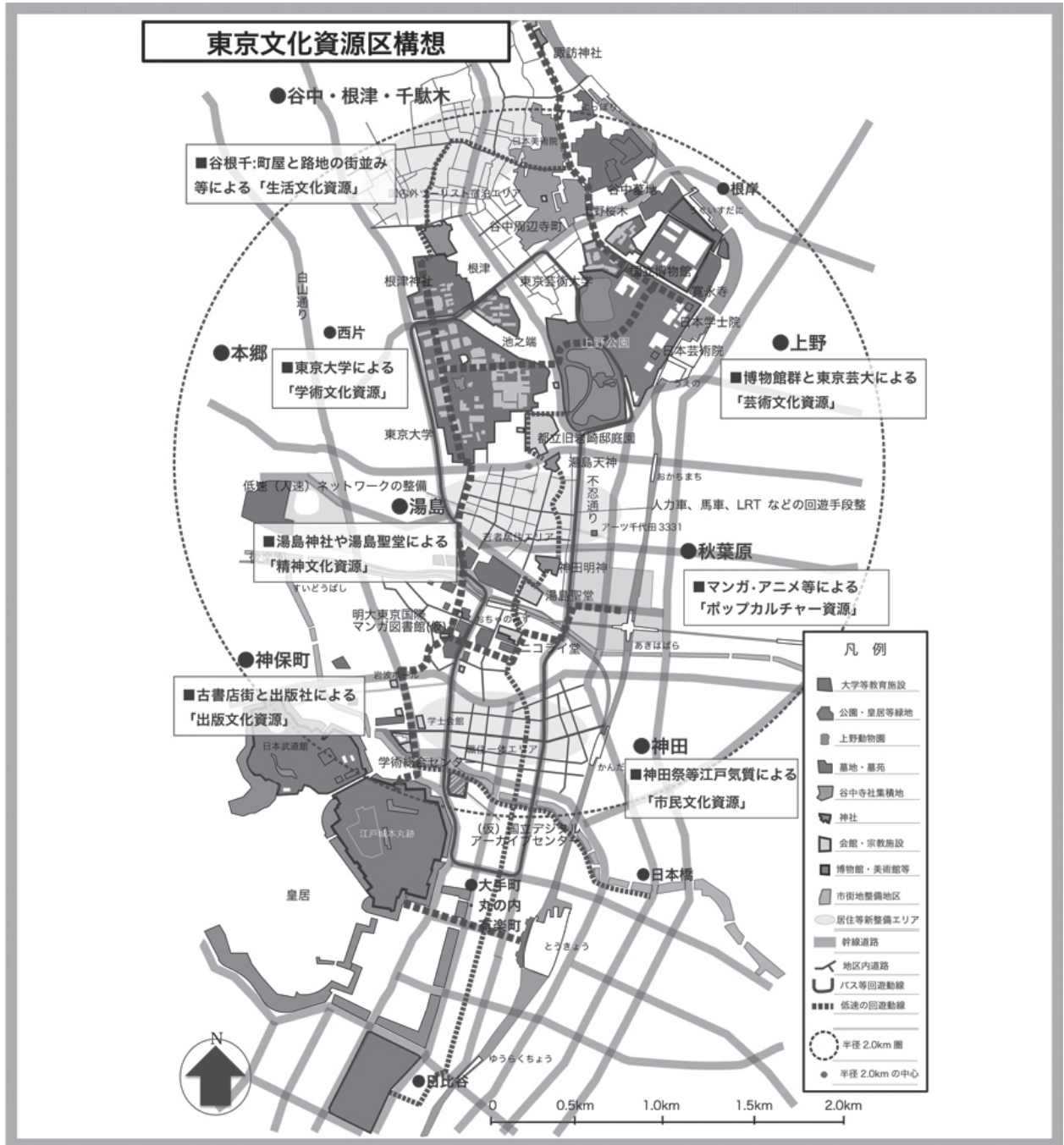
このように、明治時代から戦後の展開を概観すると、都心部から南西方向において、従前の武家地が軍用地に転換していき、さらにオリンピックを契機として、ハードパワーの象徴としての軍用地がソフトパワー的な用途（公園、美術館、放送局等）に転換していく過程で、軸線上に赤坂、六本木、青山、原宿、渋谷といった繁華街が形成されていったことが理解できる。

2 | 「東京文化資源区」とは

本論は、こうした近代化と富国強兵のプロセスを批判する目的はないが、特に1964年の東京オリンピック以降の高度成長をひた走る過程で東京が、そして日本が見失ってしまった価値が確実に存在すると考えている。

一方で、東京南西部とは対照的に、高度成長時代の輝かしい発展から取り残されたような方面が存在してお

図1 「東京文化資源区構想」の地図



資料：東京文化資源会議 Web サイト²

り、それが本題である「東京文化資源区」なのである。この「東京文化資源区」とは、東京都心から北東部方面の、神保町、神田、秋葉原、湯島、本郷、上野、谷根千（谷中、根津、千駄木）、根岸に至る地区の名称であり、実はこれらの地区は湯島天満宮を中心として半径2kmの徒歩圏

にほぼ収まってしまう（図1）。

そして、この「東京文化資源区」には、近世、近代、現代と時代をまたぐ、世界的な水準の文化資源が集積している。具体的には、神保町は古書店街と出版社による「出版文化資源」、神田は神田祭等江戸っ子気質を継承した「市

民文化資源」、秋葉原は漫画・アニメ等による「ポップカルチャー資源」、湯島は湯島天満宮や湯島聖堂による「精神文化資源」、本郷は東京大学による「学術文化資源」、上野は博物館群と東京藝術大学による「芸術文化資源」、谷根千は関東大震災と戦災を無事にくぐり抜けた町屋と路地の街並みによる「生活文化資源」、根岸は根岸文化村等による「口語文学資源」が集積している。これら「東京文化資源区」は、上野の高台を除いて、土地の区画が細かい下町エリアが多かったこともあり、高度成長期以降の大規模な再開発からは取り残されてきた。それゆえ、上述した通り、さまざまな分野での世界的な水準の文化資源が集積するアーカイブとしての価値を維持し続けてきた。

そこで、以下において、東京文化資源区におけるさまざまな文化の分野をとりあげて、より詳細に見ていきたい。

3 | 学術文化のまち

1690年に、徳川5代将軍・綱吉は上野忍岡の林羅山邸内にあった孔子廟と林家の家塾を現在の湯島1丁目に移転させた。これが現在の湯島聖堂の始まりである。その後1797年、その西隣に幕府直轄の学校である昌平坂学問所が開設された³。すなわち、「東京文化資源区」の中心に位置する湯島聖堂は、もともとは中国の思想である儒学を日本に移入するための教育機関であったのである。

明治維新を迎えて以降、「東京文化資源区」は西洋文化を移入する拠点となる。

1871年、昌平坂学問所が廃止されて、文部省が設置された。翌1872年、湯島聖堂大成殿において、日本で最初の博覧会が開催された（これが日本で最初の博物館でもある）。また、同年に東京師範学校が、1874年には東京女子師範学校が設置され、両校は現在の筑波大学、お茶の水女子大学に発展していく。さらに1872年には、日本で最初の図書館である書籍館も設置された⁴。

明治時代の神保町にはさらに多数の官学・私学が創設

された。たとえば、東京大学、一橋大学、東京外国語大学、学習院大学、明治大学、専修大学、法政大学、中央大学、獨協大学、日本大学等が集中しており、日本における近代の学術文化の発祥の地となった。

このうち、明治時代の官学においては、教師としていわゆる「お雇い外国人」たちが多数雇用された。当時、東京大学等のお雇い外国人の官舎は、現在の文京区弥生2丁目の坂上にあり、ここに住む外国人が坂を下って不忍池や上野公園を散策したところから、現在は「異人坂」という名がついている⁵。こうしたお雇い外国人を通じて、明治の学生たちはまるで砂地が水を吸収するように、西欧の文化を体得していったのである。

また1913年に、日本で最も古い外国語教育の専修学校「アテネ・フランセ」が創立された。そして1916年、教室の移動を繰り返した後、最初の独立校舎を神田神保町に開校した（1962年に現在の校舎を神田駿河台に新築）⁶。

そして1914年には、当時の中国の留学生が日本に進学する際に、日本語や英語、数学等を専門に教える東亜高等予備学校が猿楽町に設置された。中華人民共和国成立後、国務院総理（首相）を務めた周恩来も、1917年から約2年間、この学校で学んでいる等、東京文化資源区は中国と日本の橋渡しを担った⁷。

これらの大学の学生たちに教科書や参考書を販売する等の需要を背景として、神保町の周辺に書店街が集積していった。現在では、靖国通り、すすらん通り等に古書店や新刊本店が約150店舗も並んでおり、特に古書に関しては世界でも類を見ない規模となっている。

また並行して、関連する出版社や印刷所も多く設立された。たとえば、有斐閣（1877年）、三省堂（1881年）、美術出版社（1905年）、岩波書店（1913年）、小学館（1922年）、青木書店（1945年）、日本文芸社（1959年）等、神保町を創業の地とする出版社は枚挙にいとまがない。

4 | 宗教的多様性のまち

宗教学者の中沢新一は『アースダイバー』において、縄文時代の地形という歴史の古層から現代の東京を眺めた。同書の中で「上野のお山は、かつて大きな半島の突端だった。(中略)不忍池のあたりは深い入り江で、本郷の高台あたりまで海水は入り込んでいた。ここは列島が太平洋に向かって突き出した、岬の一つだったのである」と述べ、芝の岬と並んでとりわけ重要な2つの岬のひとつと位置づけた。

江戸時代になると、上野は江戸城から見て丑寅の方角、すなわち鬼門にあたるため、この鬼門を鎮護し、幕府を安泰する必要が生じ、1625年に上野に寛永寺が創建された。日本学者のサイデンステッカーは、江戸の市街を大きく遠巻きにするようなかたちで寺や墓地が連なっている様子を「江戸では用途ごとに区画割りが出来ていたが、死者のためにも土地が割り当てられていたわけである。ただあまりに身近に死者の土地があるのを嫌って、幕府は市街のいちばん端にぐるりと墓地を配置したのだ」⁸と表現した。

なお、白川静の『常用字解』によると、「都」という字の「者」という部分は、外部からの侵入に備えてつくられた「お土居(土の垣)」を象徴するとのことである⁹。その意味では、江戸という都市においては、死者たちが生者たちを静かに取り巻いて鎮護していたのだとも言える。

そして、寛永寺等の上野における寺院群のほかに、東京文化資源区においてはさまざまな宗教施設が立地している。

湯島天満宮(湯島天神)は江戸という都市が整備されるはるか以前、458年の創建と伝えられる。そして1355年、住民の請願により菅原道真を勧進して合祀した。この湯島天満宮の境内では、宮地芝居と呼ばれる芝居の興行もさかんに実施されていた。そして、この湯島天満宮、谷中の感王寺(現在の天王寺)、そして目黒の瀧泉寺の3カ所は、毎月1回のペースで興行(富くじ)が行われており、江戸の興行を代表する「江戸の三富」と呼ばれてい

た¹⁰。寺社は聖なる空間であると同時に、庶民による遊興の空間でもあったのである。なお、三富のうち、2カ所も「東京文化資源区」内で実施されていた点は興味深い。

また、神田明神(千代田区外神田2丁目)は、730年創建と伝えられており、神田、秋葉原等108の町々の総氏神様として、東京都心を見守り続けている¹¹。本殿ほかが国の有形文化財に登録されており、江戸三大祭りのひとつ・神田祭を執り行う神社としても有名である。

そして、明治以降は、キリスト教の教会も東京文化資源区に集まってきた。1874年、東京のカトリック教会の中でも有数の歴史を持つ「カトリック神田教会」(千代田区西神田)が創設された。同協会は日本で最初に、バスク人である聖フランシスコ・ザビエルに捧げられた教会である。その聖堂は国の有形文化財として登録されている¹²。

また1891年に、明治の日本に西洋のキリスト教思想を普及させた「ニコライ堂(日本ハリストス正教会教団復活大聖堂)」(千代田区神田駿河台)が完成した。ニコライ堂は、まちのシンボリックな存在となっており、国の重要文化財にも指定されている。

そして1894年、キリスト教主義に立ち、教育・スポーツ・福祉・文化等の分野の事業を展開する非営利公益団体「東京YMCA」が、後に「神田の青年会館」として親しまれる赤煉瓦の会館と語学学校を神田美土代町に建設した(2004年に閉鎖)。1902年には、日本初の国際大会「万国学生基督教青年会大会」が同会館にて開催されている¹³。これらの施設において、キリスト教の関係者が出入りするようになると、あわせて新しい思想も東京文化資源区に持ち込まれていった。

そのほか日本では数少ないイスラム教の礼拝堂「マスジド・アッサラム」¹⁴が立地している御徒町(台東四丁目)も「東京文化資源区」である。

このように東京文化資源区は、高等教育機関が集積する学術のまちであり、異文化をいち早く受容するコスモポリタンな土地であることを背景として、さまざまな宗教の受け入れに関しても寛容で、多文化が共生するまち

を形成してきた。

5 | 近代美術のまち

彰義隊ら旧幕府軍と薩摩藩、長州藩を中心とする新政府軍の間で行われた上野戦争（1868年）において、「新政府軍を指揮していた大村益次郎は正面から上野の山をつぶしてこそ、江戸の人は官軍に江戸を引き渡す根拠を見出すだろうと、彼は考え、（中略）江戸の武士を上野で葬ることによって、江戸はその魂をゆすりわたすであろうと見抜いたにちがいない」とする見解がある¹⁵。

一方、明治以降の上野は、内国勸業博覧会や東京勸業博覧会が開催される等、近代的な祝祭の中心地として、また最先端産業文化国家戦略交流発信の拠点となった¹⁶。実際のところ上野は、たとえば、公園（1873年）、動物園（1882年）、美術学校（1887年）、音楽学校（1887年）、自転車競技（1898年、不忍池）、公衆電話（1900年、上野駅）、駅伝（1917年、ゴールが不忍池）、地下鉄（1927年、上野～浅草間）、モノレール（1957年）、その他後述する食文化（とんかつ、小倉アイス）等、さまざまな分野において「日本初」の事例が多数見られる¹⁷。これらの事例リストは、まるで新奇な事象を導入することで過去の記憶を払拭しようとするかのような印象を与える。

そして現在の上野には、東京国立博物館、国立科学博物館、国立西洋美術館、恩賜上野動物園、東京都美術館、国立国会図書館子ども館、日本藝術院、上野の森美術館、東京文化会館、東京藝術大学、同美術館等、多様かつ高度な文化・教育施設が多数集積している。このように、上野が文化施設の集積地として整備されたことについて、明治政府による「上野への敬意の表し方」とする見解もある¹⁸。

なお、江戸時代には日本で「美術」という用語は存在していなかった。日本で最初に「美術」という用語が使われたのは、1873年のウィーン万博に参加する際の出品規定においてであった。その後1877年から、西欧を手本に開催された内国勸業博覧会の出品区分名称として使わ

れたことで、「美術」という用語は社会的に周知されていく¹⁹。すなわち、上野は、博覧会、博物館、美術大学という機構を通じて、日本において「美術」という用語および概念を定着させていったまちなのである。

さらに上野には、日本で最も歴史ある芸術分野の最高学府・東京藝術大学（前身は東京美術学校および東京音楽学校）が立地したため、周辺において近代美術の発展に大きな功績を遺した芸術家たちの文化資源が多数残されている。

上野の東京美術学校を創立した岡倉天心（1863～1913年）の旧居跡（台東区谷中5丁目）は、現在「岡倉天心記念公園」となっている。天心は従来の日本画の流派に反対し、洋画の手法を取り入れた日本近代美術の先覚者である。そして、日本の伝統美術の優れた価値を認め、日本画改革運動や古美術品の保存、ボストン美術館中国・日本美術部長就任等、美術行政家、美術運動家として近代日本美術の発展に大きな功績を残した²⁰。

また、近代日本画壇の巨匠である横山大観（1868～1958年）が居住した京風数寄屋造りの建物（台東区池之端1丁目）は、現在では横山大観記念館となっており、台東区の史跡にも指定されている。大観は、東京美術学校の一期生として天心に学び、天心とともに日本美術院（現在の本部は台東区谷中4丁目）を1896年に創設した。そして大観は、「朦朧体」と呼ばれる、西洋画の手法を大胆に取り入れた実験を通じて、日本画の近代化を志した。明治から昭和に至るまで常に画壇をリードし続けた大観の芸術は、近代日本画史上確固とした地位を築いており、影響を受けた画家も多い²¹。

さらに、日本近代彫塑の基礎をつくった彫塑家・朝倉文夫（1883～1964年）のアトリエおよび住居が美術館「朝倉彫塑館」（台東区谷中7丁目）となっている。建物は朝倉自身が設計したもので、国有形文化財に登録されており、敷地全体は国名勝に指定されている。ちなみに、日本にも古くから「塑造」の技法はあったが、明治時代はじめまで主な彫刻技法は彫り刻んでいく「彫刻」であった。「彫塑（ちょうそ）」という言葉は、sculptureの訳語

として、彫り刻む技法「彫刻 (carving)」とかたちづくる技法「塑造 (modelling)」を合わせたもので、朝倉の師・大村西崖によって提唱された。朝倉はこの「彫塑」という言葉にこだわりを持ち、「朝倉彫塑館」と命名したとのことである²²。

さらに上野においては、前述した内国勸業博覧会の際に建てられた仮設の美術館（後の1926年に「東京府美術館」として新設）において、官設の公募美術展「文部省美術展覧会（文展）」が1907年より開催された。この「文展」を礎として、以来、「帝展」「新文展」「日展」と名称を変えつつ、100年以上にわたって、世界にも類のない公募の総合美術展が開催されているが、その日展の本部（台東区上野桜木2丁目）も「東京文化資源区」に立地している²³。

その他、周辺においては、200年の歴史を持つ銭湯「柏湯」を改装した現代美術ギャラリー「SCAI THE BATHHOUSE」（台東区谷中6丁目）等、上野から谷根千にかけてのエリアに、アーティストのアトリエやギャラリーが点在しており、一大アートゾーンを形成している。

6 | 西洋音楽のまち

西洋音楽の受容においても、「東京文化資源区」は大きな役割を果たしてきた。1887年、東京府下谷区に日本で最初の音楽専門学校として「東京音楽学校」が設立された（同学校は、戦後の1949年、東京藝術大学が発足した際に包括されて音楽学部の前身となった）。

また1890年、東京音楽学校の本館として、日本初のオーデトリウム（演奏会場）となる「東京音楽学校奏楽堂」が建設され、1903年には日本で最初の本格的なオペラが公演された。なお、この奏楽堂は上野公園内に移築され「旧東京音楽学校奏楽堂」として現存している²⁴。

さらに1907年、東京音楽大学の前身である「東洋音楽学校」が、私立の音楽大学としては最も古く、東京市神田区裏猿楽町に設立された（1924年、豊島区南池袋に移転）。1910年に岩崎小彌太の支援を受けて「東京フィ

ルハーモニー会」が設立された。そして同会に、本郷生まれで東京音楽学校声乐科を卒業（その後ドイツ留学）した山田耕作が管弦楽部を創設した。後にこのオーケストラが新交響楽団（現在のNHK交響楽団）に発展し、クラシック音楽の普及に大きく貢献することになる²⁵。

1920年代には、神田区駿河台に「文化学院」が開校し、山田耕作が毎週幾クラスかを受け持った²⁶。

その他として1923年に、明治大学交響楽団が創設された。同楽団の活動拠点であった記念館講堂が1928年に建設され、明治大学のシンボルとなった（1998年、明治大学リバティタワーとして建て替え）²⁷。

また、1929年に（東京文化資源区の外ではあるが）日比谷公会堂が竣工した。同公会堂は、1961年に本格的なクラシック音楽のホールである東京文化会館が上野に会館するまで、東京では事実上唯一のコンサートホールとしてプロフェッショナルのオーケストラの演奏会やリサイタル等が多く開かれた²⁸。

なお、この時代は技術の進歩により、電気吹き込み式のレコード（日本最初の発売は1927年）が登場し、従前のラッパ吹き込みとは比較にならない鮮明な音質となり、また、原盤作成の生産性が向上したため、レコード鑑賞に対する大衆の需要が増大し、それに呼応するようにレコード会社が続々と設立された。現在も続くレコード会社としては、日本ポリドール蓄音器（1927年設立）、日本ビクター（株）（1927年）、キングレコード（株）（1930年）、帝蓄工業（株）（1934年）等があげられる。そして1936年、日本人の演奏（山田耕作指揮）による交響曲のレコード第1号コロムビアも発売された²⁹。

こうした中で1937年に、現在まで営業を続ける下倉楽器、谷口楽器が続けて創業した。このように楽器店が立て続けに創業した要因は、日本人による西洋音楽の演奏が普及し始めたことを背景として、文化学院や明治大学が立地し、また、東京音楽学校と日比谷公会堂を結ぶ軸線の間点にあって、交通結節点でもある神保町から御茶ノ水のエリアに楽器販売の大きなポテンシャルを見出したためであろう。

現在では、御茶ノ水、神保町、小川町、淡路町のエリアに約50店舗の楽器店が立ち並んでおり、楽器の種類と取扱数において世界でも有数の規模を誇る楽器店街となっている。

さらに、このエリアでは年間を通じてさまざまな音楽イベントが開催されており、「音楽のまち」という名称にふさわしい活況を呈している。

7 | 雪月花のまち

前述した通り、江戸時代の寺社はまち中を取り囲むように配置されていた。そして、それらの境内は、江戸の人々にとってまちの喧騒を離れた憩いの場であり、また、雪月花を楽しむ場であり、そこから新しい文芸や浮世絵が生み出されていく場でもあった。

たとえば、谷中の寺町に立地する本行寺（荒川区西日暮里3丁目）は別名「月見寺」とも呼ばれ、風流人に好まれ、境内には小林一茶や種田山頭火の句碑がある。また、浄光寺（同）は高台に位置し、展望が開け、雪見に適していたことから「雪見寺」と呼ばれた。江戸時代の人々は、情緒ある雪景色も愛でる対象としていたのである。そして降り積もった雪は音を吸収するので、江戸の人々はしんしんとした静寂そのものを楽しんでいたのかもしれない。さらに、青雲寺（同）と修性院（同）はいずれも「花見寺」とも呼ばれており、青雲寺の本堂脇には「南総見八犬伝」の筆者・滝沢馬琴の筆塚・硯塚がある³⁰。そして上野の寛永寺は、江戸時代に多数あった花見の名所の中でも随一の人気を誇っていた³¹。

同じ谷中の道灌山（荒川区西日暮里4丁目）は、江戸時代には虫の音を聞く名所、すなわち「虫聴き」の名所として知られており、秋になると文人たちが訪れ、月を見ながら松虫や鈴虫の音に聞き入った³²。日本には虫の鳴き声等の自然音を美的に愛でるという文化が連綿と生きていたのである。ただし、ヨーロッパや北米にはこのように虫の音に耳を傾けるという文化が存在しなかったため、明治以降の文化の西欧化の中で、こうした音風景と人間との関係は弱体化していった³³。なお、正岡子規には

最初に活字になった句「虫の音を踏みわけ行や野の小道」のほか、虫を詠んだ句が多数ある³⁴。

もちろん、江戸時代の人々は虫の音だけでなく、鳥の鳴き声も愛でていた。現在の谷中3、5、6、7丁目付近の旧町名は「谷中初音町」であった。「初音」とは、季節で最初に聞こえる鳥の音で、主に鶯の鳴き声のことである。江戸時代に東叡山主が都から鶯を取り寄せ、放ったところであり、このあたりには鳴き声の良い鶯がたくさんいたという。また、かつて霊梅院（台東区谷中5丁目）の境内に「初音の森」があったが、火事で焼けてしまい、その名のみが残ったという³⁵。現在では、防災広場（初音の森）やアーケード飲食店街（初音小路）の名称として「初音」という名称が継承されているほか、「初音のみち」と呼ばれる小道も谷中にはある。また、JR鶯谷という駅名も、かつての「初音の森」を偲ばせる名残である。

また、現在の本郷1丁目と2丁目間の「建部坂」は、別名「初音坂」とも呼ばれており、がけ一帯の藪がやはり「初音の森」と呼ばれていたとのことである³⁶。

谷中に隣接する根岸に暮らしていた正岡子規には、「鶯の覚束なくも初音かな」をはじめとして、「初音」を詠んだ句が計8句ある³⁷。

8 | 近代文学のまち

伊藤整は「社会の秩序が動揺して革命的な思想が現はれる時、文体の変化も急激に現はれるのが常である」³⁸と述べた。実際に、日本の近代化とともに、文芸の世界においても大きな革新が行われた。この革新は俳句が先導する形で、文学だけではなく、美術、落語、歌舞伎等複数の芸術分野を取り込むような形で、しかもこの「東京文化資源区」を中核として展開したと考えられる。

さて、俳句における革新に先立って、坪内逍遙（1859～1935年）が『小説神髓』（1885年）において、人間の感情や物事をありのままに描写する小説を提唱し、その実践として小説『当世書生気質』（1891年）を執筆した。

同じ時期、二葉亭四迷（1864～1909年）が、神田

に立地していた東京外国語学校(旧制)で学んでいた。1886年、『小説神髓』を読んだ四迷は神田仲猿楽町の自宅から本郷の坪内逍遙宅を訪ね、以後毎週日曜日になると逍遙を訪ねて文学を語り合うようになった³⁹。

四迷が1887年～1891年の間に発表した小説『浮雲』は言文一致体で書かれており、日本で最初の近代小説と呼ばれている。なお、この「浮雲」の主人公たちが生活する家が自宅と同じ神田仲猿楽町に設定されている。ただし、この『浮雲』は未完のままとなっており、四迷による実験もまた未完で終わってしまう。

また、正岡子規(1867～1902年)も逍遙から大きな影響を受けている。子規の略年譜によると、18歳の時(1885年)に坪内逍遙の『当世書生氣質』を読んで感嘆した、とある⁴⁰。その後、子規は1888年から3年あまりの間、「常磐会」という寄宿舎で生活するが、ここは逍遙の旧居を転居後に転用したものであった。

1895年に、子規は、晩年までを過ごした根岸で『俳諧大要』を執筆し、その中で「俳句は文学の一部なり」と主張している。これは、俳句以前の俳諧や連歌が知的な遊びであるのに対して、「俳句」は「特定の閉鎖された世界の中だけで通用する『あそび』ではなく、世界ぜんたいに向って開放された真実探究の路であることの宣言」と評価されている。こうした哲学のもとで、子規はこの文芸を「(俳諧の)俳句」から「俳句」へと名義変更したのである。そして、そのための方法論として「写生」を採用した⁴¹。

また、子規の根岸の家では、句会、歌会、文章の会等が頻繁に催された。このうち短歌に関しては、写実的な短歌を提唱し、子規の家で開催された歌会を源流として「根岸派(根岸短歌会)」と呼ばれる短歌結社が生まれた。なお、これらの歌会等が開催された子規の自宅は再建されて、現在は「子規庵」として公開されている。

もっとも、子規の革新は俳句や短歌だけにとどまらない。俳人の坪内稔典は、「正岡子規はその生涯において三つの大きな仕事をした。俳句、短歌、文章の革新である」と述べている。このうち「文章の革新」に関しては、子規

は自らが編集に関与する文芸誌「ホトトギス」において、写生文を公募することにより、文章の革新運動を展開した。応募者は、学生、銀行員、会社員等多様であり、坪内はこうした多様さは子規たちの文章運動の広がりを示す、と評価している。そして、子規が目指していたのは、このように誰にでも書け、何でも表現できる口語体の文章であった⁴²。

なお、この「ホトトギス」は日本で最初の文芸雑誌であり、1897年に子規の友人が、彼の俳号(「子規」はホトトギスの異名)にちなんで松山で創刊した後、1898年に、子規に後継者と望まれた高浜虚子が東京(千代田区神田1丁目)で俳誌として「ホトトギス」を再発刊した⁴³。

子規とも交遊があった同時代の文学者・森鷗外(1862～1922年)について、伊藤整は「後半生で史伝に主力を注いだのは、彼の生活の現実の秩序が明治以前のであり、彼の観察描写の現実感が史伝の中で安定することができたからである」と分析している。

また、経済学者の古賀勝次郎は「鷗外にとって、日本の近代化の問題とは、言語の問題だったのであり、明治以前の言語の世界を、出来る限り自然な形で、西洋文化を受け入れた近代日本の言葉に移行させることであった」と述べている。すなわち、鷗外は江戸の学術資源と近代東京の文学を橋渡しした存在であったとも言える。鷗外によるこうした取り組みは、人生の後半生で達成されたものであるが、子規よりも長生きした分、悩みはさらに深かったのかもしれない。

なお、鷗外が後半生の30年間を過ごし、「青年」「雁」等数々の名作を執筆した家(文京区千駄木一丁目)は2階から東京湾が臨めたことから観潮楼と称した。2012年、同地に「森鷗外記念館」が開館している⁴⁴。

さて、子規を中軸として展開された近代文学における革新は、大きく「形式論」と「理念論」に大別すると理解しやすいであろう。

近代文学の形式論とは、「口語体で表現する」ということである。前述した通り、明治時代に、書き言葉(文語)と話し言葉(口語)が乖離しているのを近づけようという

「言文一致」運動が起こった。そして、多くの文芸作品が創作される中で、洗練され整っていくこととなる。並行して国定教科書に口語体が採用されたことを通じて口語体は国民の間に浸透していった⁴⁵。すなわち、近代の文学者たちは、「国語の成立」にも大きく関与したのである。

また、近代中国を代表する文学者・魯迅は、日本に留学した際に、本郷の夏目漱石旧宅等に暮し、夏目漱石の小説等を中国語訳した。こうした活動を通じて、日本の言文一致運動は、口語体で書かれた短編小説「狂人日記」（1918年）のほか、中国における1919年代の文学革命にも影響を及ぼしていったと推測される。

なお、柄谷行人が喝破したように、日本の近代文学においては、個人の内面に存在する「近代的自我」を探求したのではなく、「言文一致」という非伝統的な制度によって、「個人の内面」が存在するかのような幻想が確立したのである⁴⁶。つまり、「言文一致」における口語的文体という技法によって、文語という技法よりも「個人の内面」を表現することが技術的に容易になったのである。

一方、近代文学の理念論とは、子規の唱導した「写生」に象徴される、目の前の事物をありのままに表現する、という表現のあり方である。子規の「写生」に関しては、画家・中村不折と親しく付き合うことを通じて、子規は西洋の美術理論を知り、その美術理論を文学理論に応用したものであるとされる⁴⁷。ちなみに、この中村不折も子規と同じ根岸に住んでいた。

そして、この形式論と理念論が結合したところに、日本の近代小説は誕生したのである。

さて、上述した逍遥や四迷、子規、さらに夏目漱石や森鷗外をはじめ、明治の文化人たちは東京をひたすら歩き回っていた。それは、もちろん現代のような公共交通機関がなかったから歩かざるを得なかったという物理的な要因はあるものの、当時の東京を歩き回ることにより、本質的な意義があったのではないかと考えられる。

ひとつには、子規の提唱した「写生」という理念に基づいて、たとえば雪月花や虫の声、鳥のさえずり、そして市井の声を求めて、明治の文化人たちは東京を歩き回って

いたのではないか。こうした事物の「写生」を行うためには、さまざまな現場に出かけていくことが極めて重要であったのである。さらに言えば、江戸のサウンドスケープを豊かに継承する根岸という土地に暮らしていたがゆえに、子規は「写生」という概念を提唱できたのではないであろうか。

さらに重要な点として、「言文一致」の基本となる口語は音声情報であるため、その伝播にあたっては、提供側および受容側の双方が同じ時間と空間を共有することが必要となる、という点である。

ちなみに、日本におけるラジオ放送の開始は1925年のことである。また、記録メディアとしてのレコードが一般市民に普及するのは、前述した通り、概ね1930年代になってからのこととなるので、ラジオやレコード以前の時代においては、同じ場で相対してコミュニケーションすることが、口語による文学運動の基本となっていたのである。

そして、明治の文化人たちは、まちを歩き回ることによって、さまざまな分野の識者に会い、議論し、それぞれの知見を交換することによって、「言文一致」「写生」等の新しい芸術思潮をより洗練されたものにしていったのである。換言すると、明治の文化人たちにとっては、まちを歩き回り、人に出会うことが創作の源泉であり、芸術活動の一部でもあったのである。現代の感性からすると、このようにまちを歩いて人に出会うという方法はあまりにスローであるように思われるが、むしろより深くかつ濃密なコミュニケーションが可能であると評価することもできる。そして、こうした出会いの化学変化の中で、結果として歴史に残るようなラディカルなイノベーションが達成されたのである。

9 | 落語のまち

落語は、たったひとりの演者が着物を着て正座したままで、背景となる美術も何もない舞台上、語りと身振り手振りだけで複数の人物や場面を演じ分ける芸能であり、観客の高度な想像力を要求することで初めて成立す

るという、世界でも類のない独創的な話芸である。

落語が演じられる場である寄席の始まりは、1787年に当時は素人の噺家であった三笑亭可楽が下谷稻荷（下谷神社。台東区東上野3丁目）の境内で入場料をとって寄席興行を行ったことだと言われている。以後、寄席は江戸庶民の娯楽として人気を得て広まっていく⁴⁸。

時代は下って幕末の1857年、上野広小路にできた軍談本牧亭は1876年に「鈴木演芸場」（台東区上野2丁目）と改名するが、現在する寄席の中では最古の歴史を誇っている。その近くには、「お江戸上野広小路亭」（台東区上野1丁目）も立地している⁴⁹。

このように「東京文化資源区」は落語に縁の深い土地であり、所縁のある落語家も多い。

たとえば、昭和の爆笑王として有名な落語家・林家三平師匠の生家が「ねざし三平堂」（台東区根岸2丁目）として1995年に開館し、ゆかりの品々を展示しているほか、定期的に落語会も開催されている⁵⁰。

また、三遊派の総帥、宗家であり、三遊派のみならず落語中興の祖として有名な落語家の初代三遊亭圓朝（1839～1900年）は湯島生まれである。そして、圓朝の墓所は谷中の全生庵（台東区谷中5丁目）にあり、毎年8月には圓朝を偲んで「圓朝まつり」が行われている⁵¹。圓朝の創作落語「牡丹灯籠」は日本三大怪談のひとつと称せられるが、本作が日本の近代文学の扉を開く触媒となったのである。そして、「牡丹灯籠」のヒロインのお露は、谷中の三崎坂をカラコロンと駒下駄の音を響かせて歩いて来るのである。

なお、前述した二葉亭四迷の『浮雲』が執筆された裏事情について、四迷は『余が言文一致の由来』において、逍遙に相談したところ「君は圓朝の落語を知つてみよう、あの圓朝の落語通りに書いて見たらどうか」とアドバイスされたことを明かしている。

すなわち、圓朝は明治時代の言文一致運動に極めて大きな影響を及ぼしたのである。換言すると、圓朝は江戸の落語から近代の文学への橋渡しを、この「東京文化資源区」を舞台として行ったことになる。

10 | 芸能のまち

能楽の観阿弥・世阿弥からの流れを受け継ぐ「観世座」は、江戸幕府から手厚い保護を受けており、その家元観世太夫や一座の人々の屋敷が、現在の神田神保町1～2丁目から西神田1～2丁目のあたりにあったことから、この一帯に「猿楽町」という名が生まれた⁵²。

その後1913年に神田猿楽町に「宝生能楽堂」が創建され、関東大震災（1923年）による焼失を経て、1924年に現在の地（文京区本郷1丁目）に「宝生会館能楽堂」が完成した（1945年の東京大空襲で焼失し、1950年に再建）⁵³。

さらに1927年には、観世流能楽師の木原家が近隣の小川町1丁目に移り住み、住居とともに舞台もつくって活動している⁵⁴。

また、神田三崎町は1890年頃から20世紀の初頭まで、東京でも屈指の演劇の中心地であった。それはこの地に「三崎三座」と呼ばれる、三崎座・川上座・東京座が相次いで設立されたからである。1891年に開設された三崎座は、東京で唯一の女優が常に興行する劇場であった（1915年に神田劇場と改称し、戦災により廃座）。また、1897年に設立された東京座は、九代目市川團十郎や猿之助をはじめ市川門下の若手俳優や幅広い層の役者が興行を行った（1915年に廃座）。そして川上座は、自由民権思想を広めた「オッペケペー節」の新派俳優川上音二郎によって1896年に設立された（その後1898年に川上の手を離れ、1901年に改良座と改称、1903年に火災により焼失）⁵⁵。

興味深いことには、前述した通り、芸能の一分野である落語に示唆を得た口語による「言文一致」運動は、上述した歌舞伎の九代目市川團十郎や川上音二郎によって、再び芸能の世界に還流していくのである。

東京座の舞台に登場した九代目市川團十郎は、歌舞伎をより高尚な演劇にしようと、「活歴」と呼ばれた演劇改良運動を始めた。これは前述した坪内逍遙の影響によるものである。

また、川上座の川上音二郎も「改良演劇」と銘打った興行を行った。この「改良演劇」は、「台本に依拠しない口立ての演技であったため、歌舞伎の文語調をはなれた口語演劇をいち早く舞台の上で実現できた」⁵⁶と評価されている。

11 | 食文化のまち

江戸時代の明暦大火（1657）後、神田多町の間屋集団が次第に盛況となり、「神田多町市場」と呼ばれるようになった。1714年、幕府は竪大工町に青物役所を設立して、多町間屋に青物御用を命じた。この「神田多町市場」が江戸の巨大な胃袋を満たす機能を担っていたのである（その後、関東大震災後の1928年、神田市場は秋葉原へ移転し、さらに1990年に市場は現在の大田区東海に移転）⁵⁷。

また、現在の岩本町2丁目は、江戸時代の享保年間（1716年～1736年）頃から「大和町」と呼ばれるようになった。幕末のころには、このまちから隣の東竜閑町にかけて、駄菓子問屋が数百軒ほど軒をつらね、関東大震災までは東京の菓子産業の中心地となっていた⁵⁸。そして、この2つのまちの間を流れる竜閑川にかかる今川橋の付近は、「今川焼」発祥の地と言われている⁵⁹。

そして、文政のころ（1818～1829年）には、湯島には麴屋が百数十軒もあったとのことである。また、湯島が麴の特産地であったことを背景として、幕末期の江戸の味噌問屋が181軒あったうち、湯島周辺にはその約45%の81軒があったとのことである⁶⁰。現在も、天野屋（千代田区外神田2丁目）が1846年の創業当時の土室（むろ）による伝統的な麴づくりを続けており、「甘酒」で有名である。また、同地区では1616年創業の三河屋綾部商店も味噌や甘酒等を製造・販売している。

このような和の食文化の伝統が根付いていた東京文化資源区においては、西洋の食文化の移入も積極的に行われた。

1872年に「築地精養軒」としての創業に続いて1876年に上野に開店した「上野精養軒」（台東区上野公

園4丁目）は、現在も営業するフランス料理店の中では最も古い店である。創業期において、夏目漱石『三四郎』（1908年）と、同作に影響を受けて執筆されたとされる森鷗外『青年』（1910年）の主人公たちも、精養軒で食事をする設定となっており、明治の文豪たちも同店を訪れていたことが確認できる。

また、1907年創業の「松栄亭」（千代田区神田淡路町2丁目）においては、夏目漱石のために考案したというメニュー「洋風カキアゲ」が今も提供されている⁶¹。

さらに、東京文化資源区には、日本で独自に進化した西洋風の料理である洋食の老舗が多い。たとえば、1902年創業の「洋食 黒船亭」（台東区上野2丁目）はハヤシライスが名物となっている。また、1909年創業の「ビアホール ランチョン」（千代田区神田神保町1丁目）はもともと洋食屋であった。

こうした洋食の文化資源の集積を背景として、大正末期に洋食屋「ポンチ軒」（千代田区神田小川町2丁目）が「とんかつ」を考案した⁶²。その後1932年には、上野や浅草に「楽天」・「喜田八」・「井泉」等「とんかつ専門」を標榜する店が次々と開店し、東京下町の繁華街でとんかつブームが起こった⁶³。もともとはフランス料理の「コートレット（cotelette）」を原型として、洋食としての「ポークカツレット」が考案された。そして、このポークカツレットをもとに、もはや日本人のソウルフードと言ってもよい存在である「とんかつ」へと転換していったのである。

東京文化資源区にはなぜかカツ関連の老舗が集積しており、1912年創業の「蓬莱屋」（台東区上野3丁目）は、豚のヒレ肉を使用した「ヒレカツ」を日本で最初（大正時代）に出した店である。また、1930年創業の「井泉 本店」（文京区湯島3丁目）は、「かつサンド」発祥の店である。

東京文化資源区においては、西洋料理だけが移入されたわけではなく、中華料理の移入も行われた。1906年創業の「揚子江菜館」（千代田区神田神保町1丁目）は、日本独自の中華料理である冷やし中華の発祥の店として知られている。前述した通り、明治時代の東京文化資源区

が中国からの留学生を多数受け入れていたことが、神保町において中華料理が集積し、「冷やし中華」のような新しいメニューが開発された背景となっているものと推測される。

西洋の食文化に移入は料理だけではなく、菓子においても行われた。

1747年、「上野風月堂」(台東区上野1丁目)が初代大住喜右衛門によって創業された⁶⁴。その後、早くも1872年には五代目喜右衛門は西洋菓子の製造を開始し、リキュール・ボンボンやビスケットを日本国内で製造販売している⁶⁵。そして、「上野風月堂」をはじめとするさまざまな和菓子店が、洋菓子の文化をいち早く日本に移入する基盤となったのである。

また、1909年創業の「みつばち」(文京区湯島3丁目)の創業者が、1915年のある日、氷あずきの種をアイスクリーム用の桶に貯蔵してみたという偶然から、「小倉アイス」は誕生した⁶⁶。このように、和の「小倉(粒あん)」と洋の「アイスクリーム」が融合して、日本独自の「小倉アイス」はできあがったのである。

このように食文化の分野においても、西洋文化を日本に移入する作業が、この「東京文化資源区」において行われていたことが確認できる。

その他、食文化として特筆すべきこととして、1691年(元禄四年)、笹乃雪初代玉屋忠兵衛が上野の宮様(百十一代後西天皇の親王)のお供をして京より江戸に移り、江戸で初めて絹ごし豆腐を作り、根岸に豆腐茶屋を開いた。これが現在に続く豆腐料理専門店「笹の雪」の始まりである⁶⁷。そして、笹の雪は子規庵の近くにあったので、子規はよく利用していたようで、子規の直筆の句碑「水無月や根岸涼しき笹の雪」(1893年)と「葬(あさがお)に朝商ひす笹の雪」(1897年)が店内にある⁶⁸。

また、「揚げ饅頭」で有名な「竹むら」(千代田区神田須田町1丁目)は、1930年創業で、店舗は東京都の歴史的建造物に指定されている。この店舗は、アニメ『ラブライブ!』や特撮番組『仮面ライダー響鬼』等に登場しており、サブカルチャーのファンにも有名である。ちなみに「揚げ

饅頭」という菓子の歴史は意外と古く、1594年に、徳川家康が戦国時代の公家・山科言経の屋敷を訪問した際、「油アケマンチウ(揚げ饅頭)」等でもてなしたという記録が残っているとのことである⁶⁹。

12 創造的政策としての「江戸屋敷プロジェクト」

さて、このようにさまざまな文化資源の蓄積を有する「東京文化資源区」において、今後どのようなプロジェクトの展開が想定されるのであろうか。以下において、そのひとつの提案事例を紹介したい。

この「文化資源区」の地区内においては、歴史的建造物(寺社、古民家、銭湯等)が多数存在するが、これらは修復と保全、不燃化対策といった課題を抱えている。また、地区内には築年数を経た中小規模のビルが多数立地しているが、これらは入居率の低下という課題を抱えている。さらに、地区内の湯島と鶯谷は日本独自のラブホテル街となっているが、少子高齢化等を背景として利用者は減少している模様である。

おそらく高度成長期においては、これらの都市機能の課題解決策として、大規模な再開発が提唱されたのではないだろうか。しかし成長から成熟を目指すべきこれからの社会においては、単純な再開発を実施するのではなく、リノベーション(改修)とコンバージョン(用途転用)によって、新しい創造的な拠点を地区内に複数整備していき、これをネットワーク化していくことで、「東京文化資源区」全体を再生していく、ボトムアップ型のプロジェクトの実践が期待される。そこで、以下において「江戸屋敷プロジェクト」を提案したい。

まず、上述した中小規模のビルやラブホテル、歴史的建造物のリノベーションやコンバージョンにあたっては、その有効活用を競うコンペティションを実施することが想定される。

そして、リノベーションコンペを実施するにあたっては、当該プロジェクトが現実化するというリアリティが必要条件となる。そのためには、対象となる物件や土地の権利者が、こうしたリノベーションやコンバージョン

に賛同し、クリエイティブなプランが提案された場合、速やかに現実のプロジェクトに移行して、プランが実現されることが肝要である。

このように考えると、実はリノベーションコンペを実施する前提として、地区のリノベーションやコンバージョンに関する事業戦略が必要となることが理解できよう。つまり、通常のリノベーションとは逆転したかたちで、エンドユーザーとビジネスモデルをあらかじめ構築したうえで、リノベーションを行うことが、遠回りなようで、実は最も確実な方法となるのである。

別の視点から述べると、リノベーションを通じて単なるハコをつくるのではなく、そこに入居する機能およびそれに付随する人材がそのまちの資産（キャピタル）になると位置づけるのである。こうしたことから、この「江戸屋敷プロジェクト」では、ハードのリノベーションに先立って、ソフトのプランニングを構想する必要があるのである。

一方で、少々回り道となるが、東京から目を転じて、地方行政の状況を概観してみたい。たとえば、平成の市町村合併の進展の結果、都道府県から基礎自治体への権限移譲が可能となっている。また、人口急減と超高齢化という大きな課題に対して、各地域がそれぞれの特徴を生かした自律的で持続的な社会を創生していくことが求められている。

また、2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックをスポーツの祭典にとどまらず、地域活性化へ向けて絶好の機会ととらえ、地域活性化や産業・観光振興に結び付けていくことを目的として、「2020東京オリンピック・パラリンピックを活用した地域活性化推進首長連合」が2015年6月に第1回総会を開催されている（2015年7月31日現在で344自治体が参加表明）⁷⁰。

このような状況を背景として、東京文化資源区においては、既存のような道府県のアンテナショップではなく、基礎自治体や地域単位でのアンテナショップをリノベーションによって整備・集積させていこうというのが本提

案である。そして、これらのアンテナショップは、かつての「江戸屋敷」のように、地域と東京の文化交流を担う拠点となることが望まれる。そして、たとえば谷根千地区においてアンテナショップが10軒ほど整備されるとすれば、それはわざわざ訪問する価値のある集積になると評価されるのではないであろうか。

そして、この「江戸屋敷プロジェクト」は単純なまちづくりではなく、人づくりの事業でもある。たとえば、これらの「江戸屋敷」においては、旅行のコーディネートや移住相談等、当該地域に関するワンストップのコンシェルジェが配置されることが望まれる。また、これらの「江戸屋敷」に当該地域の食材を活用したレストランやカフェが併設されることも必要であろう。これらの人材に関しては、当該自治体の地元の若手を公募して採択することが望まれる。そして、任期を満了した後は、その若手は東京の「江戸屋敷」で得た経験と知識を生かして、地元に戻って自分の店や事業を新たに開業すればよいのである。その他、これらのアンテナショップ群においては、普段は交流のない自治体同士が、東京というプラットフォームにおいて、地域と地域で直接につながるといった副次的効果も期待される。

さらに、リノベーションコンペにおいては、通常の場合と同様に、ある法規制（たとえば、消防法等）を緩和することができれば、よく魅力的なプランになるという場合において、関連する規制が緩和されることを前提とした提案も受け付けることが望ましい。換言すると、具体的な個別のプロジェクトからの特区提案を公募することである。こうしたリノベーションから、新しい特区的な提案が実現できれば、この運動は東京文化資源区から全国へと波及していくことになる。

この「江戸屋敷プロジェクト」はひとつの事例であるが、これから2020年へ向けて、施策やプロジェクトについても、よりクリエイティブなものに変革していく必要があるのである。

13 | おわりに

急激な西洋化の荒波が押し寄せた明治という時代の中で、上述した通り、江戸と東京、すなわちプレモダンとモダンを接続する中心地となったのが、「東京文化資源区」であった。大江戸と東京を橋渡しする、芸術と学問の小宇宙（マイクロコスモス）が、この文化資源区に存在したのである。

また、江戸時代の参勤交代、鉄道が整備されて以降の上野を窓口とする上京、そして歌に残る望郷の念等に確認されるように、「東京文化資源区」は東京と地方の結び目でもあった。そしてさらに、国内だけではなく、お雇い

外国人や留学生、宗教施設等、人と人の交流を通じて、「東京文化資源区」は洋の東西をも結んでいた。

現代に目を転じると、2020年には東京で2度目のオリンピックが開催される。そして、オリンピックはスポーツの祭典であると同時に「文化の祭典」でもある。特に2012年のロンドン大会以降、文化プログラムの位置づけが重視されるようになっている。こうしたことから、2020年へ向けて、文化政策やまちづくりの大転換が期待されている。そのような大転換において、この「東京文化資源区」が果たす役割は、とても大きいものであるのではないだろうか。今、「東京文化資源区構想」を構想する意義が、まさにそこにあるのである。

【注】

- ¹ ロラン・バルト (1970). 『記号の国』. みすず書房.
- ² 東京文化資源会議Webサイト 〈<http://tohun.jp/>〉
- ³ 公益財団法人斯文会ホームページ 〈<http://www.seido.or.jp/yushima.html>〉
- ⁴ ibid.
- ⁵ 台東区の公式観光情報サイト「TAITOおでかけナビ」 〈http://taitonavi.jp/pdf/pamph_ja/042.pdf〉
- ⁶ アテネフランセ ホームページ 〈<http://www.athenee.jp/introduction/history.html>〉
- ⁷ 千代田区ホームページ 〈<https://www.city.chiyoda.lg.jp/koho/bunka/bunka/chome/yurai/nakasaruugaku.html>〉
- ⁸ エドワード・サイデンステッカー (1983). 『東京 下町山の手 1867-1923』. 講談社学術文庫.
- ⁹ 白川静 (2003). 『常用字解』. 平凡社.
- ¹⁰ 東京都公文書館ホームページ 〈http://www.soumu.metro.tokyo.jp/01soumu/archives/0703kaidoku15_2.htm〉
- ¹¹ 神田明神ホームページ 〈<http://www.kandamyoujin.or.jp/profile/>〉
- ¹² カトリック神田教会ホームページ 〈<http://catholickandachurch.org/about/church/church2>〉
- ¹³ 東京YMCAホームページ 〈<https://tokyo.ymca.or.jp/ymca/enkaku.html>〉
- ¹⁴ 「マスジド」は、イスラムの礼拝所のことで、英語（日本への外来語）の「モスク」はそれがなまった言葉。また「アッサラーム」は、「アッサラーム・アレイクム」の略式で、原義は「神の平和があなたの上に」の意味。
- ¹⁵ 鈴木博之 (1990年). 『東京の地霊 (ゲニウス・ロキ)』. 文藝春秋.
- ¹⁶ 文化庁 (2015). 『上野「文化の杜」新構想推進会議WG中間報告』. 〈<http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kondankaito/bunkanomori/>〉
- ¹⁷ 台東区の公式観光情報サイト「TAITOおでかけナビ」 〈http://taitonavi.jp/pdf/pamph_ja/054.pdf〉
- ¹⁸ ibid.
- ¹⁹ 佐藤道信 (1996). 「〈日本美術〉誕生」. 講談社.
- ²⁰ 茨城県天心記念五浦美術館ホームページ 〈<http://www.tenshin.museum.ibk.ed.jp/okakura/>〉
- ²¹ 国立新美術館「横山大観 新たな伝説へ」 〈<http://www.asahi.com/taikan/intro/>〉
- ²² 朝倉彫塑館ホームページ 〈<http://www.taitocity.net/taito/asakura/chousou.html>〉
- ²³ 日展ホームページ 〈<https://www.nitten.or.jp/about/rekishitoima.html>〉
- ²⁴ 日本建築学会・編 (2002). 『音楽空間への誘い—コンサートホールの楽しみ』. 鹿島出版会.
- ²⁵ 東京音楽大学ホームページ 〈<http://www.tokyo-ondai.ac.jp/about/welcome.html>〉
- ²⁶ 文化学院ホームページ 〈<http://bunka.gakuin.ac.jp/about/history.html>〉
- ²⁷ 明治大学交響楽団ホームページ 〈<http://meioke.com/pc/about/sousetsu.html>〉
- ²⁸ 千代田区ホームページ 〈<http://www.e-chiyodacpa.jp/sub/Yaon.html>〉
- ²⁹ 倉田喜弘 (1979). 『日本レコード文化史』. 東京書籍.
- ³⁰ 台東区の公式観光情報サイト「TAITOおでかけナビ」 〈http://taitonavi.jp/pdf/pamph_ja/064.pdf〉
- ³¹ 国会図書館ホームページ 〈<http://www.ndl.go.jp/landmarks/sights/kaneiji/>〉
- ³² 国会図書館ホームページ 〈<http://www.ndl.go.jp/landmarks/sights/dokanyama/>〉

- ³³ 鳥越けい子 (2006). 「ランドスケープにおける音風景の復権 五感で味わう公園」. 『水の文化』. 24.
(<http://www.mizu.gr.jp/kikanshi/no24.html>)
- ³⁴ 子規庵ホームページ (<http://www.shikian.or.jp/profile.html>)
- ³⁵ 台東区ホームページ (<http://www.city.taito.lg.jp/index/kitemite/abouttaito/kyuchomei/kyu-tyoumei.files/6-9.pdf>)
- ³⁶ 文京区教育委員会 (設置の標識)
- ³⁷ 子規記念博物館ホームページ (<http://sikihaku.lesp.co.jp/community/search/index.php>)
- ³⁸ 伊藤整 (1953). 「近代日本人の発想の諸形式」. (<http://www.japanpen.or.jp/e-bungeikan/study/pdf/itosei02.pdf>)
- ³⁹ 桶谷秀昭 (1996). 「浮雲 解説」. 新潮文庫.
- ⁴⁰ 子規庵ホームページ (<http://www.shikian.or.jp/profile.html>)
- ⁴¹ 小西甚一 (1981). 『俳句の世界』. 講談社学術文庫.
- ⁴² 坪内稔典 (2005). 『柿喰ふ子規の俳句作法』. 岩波書店.
- ⁴³ 千代田区観光協会ホームページ (<http://www.kanko-chiyoda.jp/tabid/2241/Default.aspx>)
- ⁴⁴ 文京区観光協会ホームページ (<http://www.b-kanko.jp/sanpo/course04.html>)
- ⁴⁵ 国立国会図書館ホームページ (<https://rnavi.ndl.go.jp/kaleido/entry/jousetsu150.php>)
- ⁴⁶ 柄谷行人 (2008). 『定本 日本近代文学の起源』. 岩波現代文庫.
- ⁴⁷ 松井貴子 (2007). 「響き合う句画：子規と不折の《猫・海老・行水・重ね絵》」. 宇都宮大学国際学部研究論集 23, A1-A15.
- ⁴⁸ 台東区の公式観光情報サイト「TAITOおでかけナビ」 (http://taitonavi.jp/pdf/pamph_ja/054.pdf)
- ⁴⁹ 台東区の公式観光情報サイト「TAITOおでかけナビ」 (http://taitonavi.jp/pdf/pamph_ja/001.pdf)
- ⁵⁰ ねぎし三平堂ホームページ (<http://www.sanpei-hayashiya.com/#sanpeido-1/c1gcq>)
- ⁵¹ 台東区の公式観光情報サイト「TAITOおでかけナビ」 (http://taitonavi.jp/enjoy_detail.html?no=343)
- ⁵² 千代田区ホームページ (<https://www.city.chiyoda.lg.jp/koho/bunka/bunka/chome/yurai/nakasaruugaku.html>)
- ⁵³ 公益社団法人宝生会ホームページ (<http://www.hosho.or.jp/nohgakudo/>)
- ⁵⁴ 千代田区区民生活部 (2005年). 『千代田まち事典』. 千代田区.
- ⁵⁵ 千代田区観光協会ホームページ (<http://www.kanko-chiyoda.jp/tabid/332/Default.aspx>)
- ⁵⁶ 兵藤裕己 (2005). 『演じられた近代〈国民〉の身体とパフォーマンス』. 岩波書店.
- ⁵⁷ 多町二丁目町会ホームページ (<http://www.daisuki-kanda.com/guide/association/ta2/>)
- ⁵⁸ 千代田区ホームページ (<https://www.city.chiyoda.lg.jp/koho/bunka/bunka/chome/yurai/yamato.html>)
- ⁵⁹ 千代田区区民生活部 (2005年). 『千代田まち事典』. 千代田区.
- ⁶⁰ 文京ふるさと歴史館
- ⁶¹ 交通新聞社・編 (2010). 「さんぽ帖 東京幕末・明治」. 交通新聞社.
- ⁶² 川本三郎 (1999年). 『銀幕の東京 映画でよみがえる昭和』. 中央公論新社.
- ⁶³ 岡田哲 (2000). 『とんかつの誕生——明治洋食事始め』. 講談社 [講談社選書メチエ].
- ⁶⁴ 台東区の公式観光情報サイト「TAITOおでかけナビ」 (http://taitonavi.jp/pdf/pamph_ja/055.pdf)
- ⁶⁵ 上野風月堂ホームページ (http://www.fugetsudo-ueno.co.jp/history_meiji.html)
- ⁶⁶ みつばちホームページ (<http://www.mitsubachi-co.com/history.html>)
- ⁶⁷ 笹乃雪ホームページ (<http://www.sasanoyuki.com/iware/index.html>)
- ⁶⁸ 台東区の公式観光情報サイト「TAITOおでかけナビ」 (http://taitonavi.jp/pdf/pamph_ja/045.pdf)
- ⁶⁹ とらやホームページ (<https://www.toraya-group.co.jp/toraya/bunko/historical-personage/101/>)
- ⁷⁰ 三条市ホームページ (<http://www.city.sanjo.niigata.jp/eigy/page00176.html>)